



気さくに迎えてくれた中島さん夫婦

にする、昔ながらの地域の風習をこれからは私たち世代が受け継ぎ、大切に継承していきたい」とも話します。

その日皆さんはお堂の中にしつらえたこたつを囲み、北村さん手作りの煮染めなどを味わいながら「プチ堂づめ」を楽しんでいました。

## 隠れ家的な宿のような家

地藏堂から妙見川に沿って東に足を進めると、左手の高台に古風な家を見つけました。興味津々で訪ねてみると、主の中島友博さんと妻の久子さんが笑顔で迎えてくれました。

坂道を上りきると、石畳のアプローチを囲むように手入れの行き届いた樹木や盆栽が育っています。昔ながらの家に手を加え、古民家風にしつらえたというたまたまは、隠れ家的な宿のような雰囲気を感じさせています。土間作りの玄関から続く板張りの空間には、古たん



玄関へと続くアプローチは風情があります



上/アンティークのたんすや絵付けの皿が飾られています  
右/中島さんの亡き父親が手掛けた龍のこて絵



敷地の一角にある久子さんのアトリエ

すとアンティークの絵付けの大皿が飾られており、家の中の随所に古き良き物を愛してやまない住人の思いが感じ取られます。

「ほとんどが亡き父親のコレクションです」と友博さん。10年前に92歳で亡くなった末人さんは左官業の傍ら、骨董品のコレクターで水墨画もたしなんだそうです。久子さんは「義父が集めてくる骨董品を磨き上げるのが私の役目で、古物の魅力を教わりました。水墨画も見よう見まねで覚えたんです」と話します。母屋の東側の屋切りには、左官職人だった末人さんが手掛けた「こて絵」が残されています。左官道具のこてを使い、しつこく描かれた

龍の意匠は圧巻です。

庭の手入れをして過ごすことが多いという友博さんと、敷地内の離れで水墨画の筆を取る久子さん。「家での時間が楽しいから、いろんな所に出かけなくてすみます」と2人は口をそろえます。「緑が芽吹く頃にまたいらつしゃい」と仲むつまじい笑顔に見送られ、中島家を後にしました。

## 花の命を押し花に込めて

20年前に古閑地区に移り住んだという、入江幸恵さんに出会いました。入江さんの趣味は押し花。玄関に飾られた作品群から「垂れ桜」の作品に目が釘付けになりました。

額縁の中に満開の垂れ桜。サクらの花びらには北海道などで見ら

れるナナカマドの花を使い、花が咲く頃の黒々とした枝ぶりは植物の根で表現されています。

「押し花を始めたのは15年ぐらい前です。咲き始めの花びらを摘み、紙の上に置いておもりをし乾燥させます。それらを一つずつレイアウトしていくんです。根気がいるけど、達成感を覚えます」と入江さんは言いつつ、「花の命を奪うようでもいつも申し訳ない気持ちになるけれど、一枚の絵のように美しく保存してあげること、花も喜ぶと思うんです」とも話します。たくさんさんの花々が咲き誇るこれから、入江さんの心は浮き立ちます。



一年を通じて押し花を楽しんでいる入江さん

ナナカマドの花を押し花にして入江さんが手掛けた「垂れ桜」の作品

